

フランス語に於ける文の展開と 「代名詞」の役割

鈴木 覺
Satoru SUZUKI

序 論 何を論ずるにしても、本質を踏へなければならぬ。現象でしかないものを本質と取り違へて論ずると、一見尤もらしく見える議論もやがてあちこちでぼろを出して来るものである。現象はどう逆立ちしたところで所詮現象でしかない。現象の背後にあたつて現象を生ぜしめる構造を明かにし、更にこの構造を支配する法則性を明かにして、初めて本質を探り得たと言ひ得るのである。

ところで、所謂代名詞に就いての研究は今日このやうな本質論的レベルに達してゐるとは到底言ひ難く、率直に言つて現象論的レベルに停滞してゐると言はざるを得ない。名詞に代るといふ、代名詞の機能・現象に眼を奪はれて、これを機能主義的にあれやこれや解釋してゐるに過ぎないのである。例へば、現代フランス語には話し手から近いものを指す指示詞 (ceci, celui-ci, voicy 等) の代りに、話し手から遠いものを指す指示詞 (cela, celui-là, voilà 等) が用られる傾向が見られるが、世の文法書はかかる現象を羅列し記述するのみで、そのよつて来る原因を明かにすることなく、精々、文體的効果を指摘するに止つてゐる。この問題に關する筆者の見解に就いては、『愛知縣立大學外國語學部紀要語學文學篇』1982年第15號 所收の拙論「代名詞轉換の論理構造」を見ていただくことにして、今回は文の展開に於ける代名詞の役割を、代名詞の本質を踏へて論ずることにしよう。

文とは何か いきなり代名詞の文展開に於ける役割を論ずる前に、「文とは何か」について數言費したいと思ふ。文の定義は、今日の構造主義言語學や生成變形文法では、その立脚する認識論の水準から推して、文の直接の原型である認識の過程の構造を踏へてなされてゐるとは思はれないが、文とは一つの纏つた思想の表現であるといふ點では何人も異論がなからう。ではこの思想とはどのやうにして成立するかと言ふと、對象に就いての認識と、この對象に對峙する認識主體の判斷・推測・感情等との統一によつて、言ひ換へれば、客體的認識と主體的認識との統一によつて成立する。これを言葉で表現したものが文なのである。従つて文はこのやうな認識構造を反映して、客體的表現と主體的表現とから成立してゐるのであるが、そのいずれかが零記號になることがある。「ああ」といふ感歎詞のみの文では客體的表現が、「火事」といふ文では主體的表現が、零記號になつてゐる。然し乍ら、言語表現の直接の原型たる認識過程に於いては二種類の認識が統一された構造をもつてゐるのであるから、二種類の表現の一方しか表はされてゐなくても、一つの纏つた思想の表現であれば文と見做すべきなのである。

この論文で考察の對象とするのは、常識でいふ完全な文、つまり主語と動詞を備へた文、しかも複雑な思想を述べる所謂複文である。この種の文の特徴を日本文と比較し乍ら捉へ、フランス文の中で果す代名詞の役割を考察してみたいと思ふ。

フランス文の特徴 文を締め括る判斷・推測等の主體的表現に注意し乍ら、日本文とフランス文を比

較して直ぐ氣附くことは、主體的表現が日本文では文末に来るのに、フランス文ではそれが文の前方に出て、主部と述部との間にあつて両者を左右に振り分け、時枝誠記の言葉を借りて言へば、天秤型統一形式をとることである。このことは、表現主體の判断をもろに表はす être の場合に典型的に見られる (A est B)。一般の動詞の場合には、フランス語は所謂屈折語であるから、諸語の主體的表現は客體的表現である動詞語幹に續く語尾として表はされる。いづれにしても文を締め括る主體的表現が文の前方に出る傾向のあることは、日本語と比べた場合注目すべきことである。因みに、所謂ポオル・ロワヤル文法では、動詞の活用語尾がこのやうな表現を擔つてゐることに着目して、人間の思考の對象を表はす語、つまり客體的表現にではなく、人間の思考の形態と様式を表はす語に、つまり主體的表現に分類してゐる。⁽¹⁾

さて、上述のやうに基本的な文構造が互ひに異なる日本文とフランス文は、複雑な思想を述べる場合に、まるで正反對の展開の仕方をする。即ち、日本文では、種種思想の枝葉を擴げた後に全體を主體的表現で締め括る收束型の文展開をするのであるが、フランス文では、先づ文の根幹を述べて主體的表現で締め括り、枝葉はその後で擴げる展開型の文構造を示すのである。⁽²⁾ そして次の例文が示す如く、日本語では枝葉の末尾を所謂形式名詞で締め括るのに對し、フランス語では枝葉の冒頭に代名詞を立てて、その後で枝葉を伸ばすのである。

彼が病氣なのを君は知つてゐるか

Sais-tu qu'il est malade?

また、フランス語では文の根幹と枝葉との繋りを示す爲の代名詞の用法が非常に發達してゐることも注目に値する。

Il est certain qu'il a manqué son train.

ところで、上の例文中に用ゐられてゐる que を、筆者が代名詞としてゐることを奇異に感ぜられた讀者も尠くなくあらうと思ふ。そこで、フランス語に於ける文の展開と代名詞の役割を具體例で見る前に、代名詞とはそもそも何なのかを考へて見よう。

代名詞の本質 代名詞といふ名前は、名詞に代るといふ機能・現象から附けられたものである。なる程、手許にある本を言葉に表はさうとする場合、フランス語なら本といふ概念は男性名詞 livre で表はすが、反覆を避けて代名詞 il で表はすことが出来る。これを見ると、名詞に代る品詞といふ代名詞の定義が正しいやうに思はれる。然し乍ら、名詞に代るといふ機能を代名詞の本質と取り違へると、をかした事態が生ずるのである。フランス語では âne (驢馬) は sot (馬鹿者) の代りに用ゐられるとされてゐるが、では âne は sot の代名詞であらうか。sot といふ語に代るといふ機能を âne は見事に果してゐるから、âne は代名詞といふことにならう。だが、âne を代名詞の仲間に入れることには、假令代名詞は名詞に代る品詞だと定義する文法家御本人と雖も躊躇を覚えるに相違あるまい。そこで持出される理窟は、所謂代名詞は意味が抽象的だが âne の意味は具象的だとか、所謂代名詞は廣範圍の名詞に代り得るが、âne はさうではないとか言ふものである。然し、意味が抽象的か否かとか、表はす意味が廣いか狭いかは語の本質を決定するものではない。例へば、être (存在) といふ語は、この世に存在するあらゆるものを表はすことが出来るし、意味が抽象的で且つ意味が廣いのであるから、être を代名詞に入れなければ定義の主尾一貫性に缺けるといふものであらう。このをかした定義を主尾一貫させたものが所謂不定代名詞で、その中味は抽象的な概念の名詞や、それに、後述する「不特定關係」を表はす「關係詞」のついたものに過ぎないのである。

言語表現も他の表現と等しく、対象 — 認識 — 表現といふ過程的構造を持ってゐるのであるから、表現に現はれた現象だけを形式主義的・機能主義的に解釋するのではなく、表現に至る過程を探ることによって語の本質を見出し定義しなければならない。所謂代名詞による表現が他の品詞による表現と異なる特徴は、表現主體が表現対象と結ぶ關係概念を表はすといふところにあるのである。これが所謂代名詞の本質である。⁽³⁾ 所謂人稱代名詞は表現主體と表現対象との人稱關係を表はす表現である。第一人稱代名詞は表現主體と表現対象化された自らとの關係を表はし⁽⁴⁾、第二人稱代名詞は表現主體と聞き手との關係を表はし、第三人稱代名詞は表現主體と表現主體や聞き手以外のものとの關係を表はすのである。

等しく第三人稱的關係にある表現対象でも時空間的に表現主體からの遠近の差異によって捉へることが出来る。⁽⁶⁾ これを表はすものが所謂指示代名詞である。指示とか démonstratif とか言ふのは、このやうな遠近關係の認識から派生する機能・現象を捉へて附けられた名稱に過ぎないのである。所謂指示代名詞は表現主體と表現対象との關係概念だけでなく、かかる關係にある實體をも表はすのであり、所謂指示形容詞はかかる關係のみを表はすのである。

さて、所謂代名詞といふものを、上に述べたやうに表現主體と表現対象との關係概念を表はす語と正しく定義し直すと、表現対象は何も實體だけとは限らず、實體のもつ屬性も表現対象となり得るし、これと表現主體は或る關係に立ち得るから、それを表す語があつても少しも不思議ではない。 tel, tellement, tant, autant, si, ainsi, aussi 等がさういふ關係を表はす語である。但し、これらは日本語のやうに「こんなに・そんなに・あんなに」と、遠近の差異を表はしてをらず、屬性を單に第三人稱的關係で捉へてゐるだけである。表現主體と表現対象との時空間的關係を表はすものには、 ici・là・ceci・cela・celui-ci・celui-là・maintenant・alors・aujourd'hui・demain・hier 等がある。かうなると代名詞といふ呼び名は如何にも不適切である。筆者は代りに關係詞といふ名稱を提案したいと思ふ。さうすると従來の所謂關係代名詞等と大變紛はしくなるが、この關係代名詞等及びそれと同形の所謂疑問代名詞・疑問副詞・接續詞に就いては、名稱及びそれを支へる文法的な考へ方そのものに筆者は深い疑問を抱いてゐるものである。然し乍ら、これに就いては、フランス文の展開の仕方を具體的に論ずる過程で検討を加へたいと思ふ。

文展開に於ける代名詞の役割 では、早速文の展開に於いて所謂代名詞、と言ふよりもつと正確には、筆者の言ふ「關係詞」が如何に重要な働きをするか、具體的に見ることにしよう。

[1] ... **combien que** la vérité de Dieu convient (*sic*) en **cela** avec le jugement commun de tous les hommes, **que** la seconde partie de notre sagesse gît en la connaissance de nous-mêmes, toutefois en la manière de nous connaître, il y a grande différence. (Jean CALVIN, *Institution de la religion chrétienne* ⁽⁶⁾)

上の例文の冒頭にある combien は従來の文法では疑問副詞とされてゐるが、疑問を表はす文にのみ用ゐられる譯でないことは、上の文を見ても判らう。疑問文に用ゐられることが多い爲、この語自體が初めから疑問の意味を持つてゐるかのやうに錯覺してゐるだけなのである。従來の文法に拘泥する頭の持主には奇妙なことを言ふやうに思はれるかも知れないが、一般的に言ってフランス語には疑問といふ主體的認識を直接に表はす語、即ち主體的表現の語はなく、それを表はすには語順乃至文型や抑揚によって媒介的に表はすしか方法がないのである。 combien は數量や屬性の程度と表現主體との關係を不特定なものとして表はす語である。これが疑問文に用ゐられるのは、表現主體が対象を具體的な數量や

屬性でもつて捉へたり、表現主體と對象の屬性との關係を *tellement, tant, autant* のやうに特定關係に於いて捉へられないからである。他の所謂疑問代名詞・副詞に就いても同様に考へるべきで、それ自體が疑問の主體的表現なのではない。個々の文に於ける機能に目が眩んで、全く同一のものを、或る時は疑問代名詞・副詞、或る時は關係代名詞・副詞、或る時は接續詞と言ふやうに、それぞれをばらばらに考へては、様様な機能・現象を貫く本質を見失つてしまふであらう。

所謂疑問詞には感歎文に用ゐられるものがある。次の文では今日の文法で疑問形容詞とされてゐる *quel* が何故用ゐられてゐるのであらうか。

[2] *Quelle bonne idée!*

それは妙案として捉へられてゐる對象の屬性が表現主體の表現能力を凌駕するので、自らと對象の屬性との關係を特定關係に於いて捉へることが出来ないからである。そこで表現主體と屬性との不特定關係を表はす *quel* が用ゐられるのである。

例文〔1〕の *combien* に續く *que* も、このやうな文ではその機能によつて接續詞とされ、疑問文で用ゐられると疑問詞とされ、所謂關係節で用ゐられると關係代名詞とされるといつた具合で、その取扱ひは全くばらばらである。ここでは次に續く思想（…*de tous les hommes*迄）を、表現主體自身は詳しく知り乍ら對象が複雑で端的には捉へられないので、*que* によつて先驅的に、漠然と抽象的・概括的に實體化（名詞化）して捉へ、それを表現主體との不特定關係に於いて表現してゐるのである。何を對象として *que* が捉へてゐるかは直ぐ後で詳しく述べられるので、不特定の把握で充分なのである。この *que* が何故疑問文で用ゐられるかと言ふと、對象を明確には捉へられないからである。

[3] *Que de gens!*

上の文では *que* が感歎文で用ゐられてゐる。これは餘りの群衆を前に具體的に *une multitude de gens* とか表現主體と特定關係において *un si grand nombre de gens* とか簡単に捉へられないからである。このやうに、表現主體が表現對象を不特定關係で捉へるのは、

- (1) 對象を具體的に知らない場合
- (2) 具體的に詳しく知り乍ら對象が餘りに複雑で端的には捉へられない場合
- (3) 簡単に表現して充分足りる場合

がある。

例文〔1〕に於ける *cela* は後に述べられる事柄を第三人稱的（遠稱）關係で捉へた先驅的表現で、*la seconde partie* の直前にある *que* と呼應してゐる。この *que* は具體的に思想を述べる後續の部分（*la seconde partie* から *nous-mêmes*迄）に對して先驅的把握の表現となつてゐる。

次の例文〔5〕では *tant* は屬性の程度を第三人稱的關係に於いて捉へて先驅的に表現してをり、具體的には *plutôt* の直前にある *que* 以下によつてその程度の内容を詳しく述べてゐるのである。この *que* はこれから述べる思想を抽象的實體的に捉へた先驅的表現になつてゐる。

[5] … *tant* s'en faut *que* cette reconnaissance nous doive élever le cœur, *que* plutôt elle nous doit amener à humilité et modestie. (Jean CALVIN, *op. cit.*)

[6] … selon l'opinion de la chair, il semble bien avis *que* l'homme se connaisse *lors* très bien *quand* en se confiant en son entendement et en sa vertu il prend courage pour s'appliquer à faire son devoir. (*ibid*)

例文〔6〕では表現主體の考へを先づ所謂非人稱代名詞 *il* によつて先驅的に捉へ、その考への内容は *que* 以下に述べるといふ形式をとつてゐる。この *que* を接續詞と考へるのは間違ひで、次に述べる内容を先驅的に實體化して捉へる「不特定關係詞」と考へるべきである。

lors は時間を表現主體と第三人稱的關係に於いて捉へて、次の *quand* 以下の先驅的表現となつてゐる。さて、この *quand* も、單に表面的な差異でしかない機能に従つて、時には接續詞、時には疑問副詞とばらばらに命名・分類されてゐるが、その本質は、*lors* と異つて、時間を表現主體と不特定關係において捉へた表現なのである。*quand* はそのやうな表現の語だからこそ、具體的に時間を捉へられない場合や表現主體と特定關係で捉へられない場合の文、即ち疑問文に用ゐられるのである。例文〔6〕では *quand* は時間を一旦不特定關係に於いて抽象的に捉へてゐる。如何なる時間であるかは後續の部分が述べてゐるのである。

[7] *Que la paix soit durable (, ce) n'est pas certain.*

この例文は所謂接續詞 *que* が主語節を導いてゐる例である。接續詞とされてゐるこの *que* は實は、既に述べたやうに、これから展開する思想を抽象的に實體化して先驅的に把握してゐる「不特定關係詞」に過ぎないのである。

このやうに、*que* によつて一旦先驅的に把握して置くと文構造が非常に明確になる。そのことは *que* を省いた場合を想定すれば直ぐに判るであらう。名詞構文に訴へて

[8] *La durabilité de la paix n'est pas certaine.*

と言ふことも出来るが、いつもかう旨く行くとは限らない。總じて、名詞構文、即ちいきなり名詞に訴へる直接的表現よりも、*que* によつて發言内容を先づ抽象的に實體化して捉へ、次に主語動詞補語を備へた節によつて發言内容を述べるといふ媒介的表現の方が、表現の幅が擴がり、思想を大きく且詳しく多面的立體的に展開出来るのである。

[9] *Qui sème le vent récolte la tempête.*

例文〔9〕の *qui* は關係代名詞とされてゐるが、これが疑問文に用ゐられると疑問代名詞と呼ばれるといつた具合で、今迄に述べて來た *combien*, *que*, *quand* 等と同じく、機能主義的な觀點からばらばらに取扱はれるばかりで、本質を踏へて統一的に把握されてゐない。また、上のやうな文に就いては、先行詞 *celui* が「省略」されてゐると言ふ説明が屢屢加へられるが、所謂關係代名詞には先行詞がなければならぬと勝手に決め込んでゐるから、さう言ふ苦し紛れの説明をせざるを得なくなるのである。例文〔9〕は單に *semer le vent* なる行爲をする人間を表現主體が漠然と不特定關係に於いて捉へてゐるだけのことで、*celui qui* 云々と言つた場合には對象を二重に把握してゐるのに對して、*qui* のみの表現は對象把握が一重なのである。先行詞といふ妄想にしがみつくと文法家は次のやうな *qui* を何と説明するのであらうか。

[10] *Embrassez qui vous aimez.*

次の例文〔11〕〔12〕は中世フランス語の例であるが、ここでは逆に所謂關係代名詞が「省略」されてゐる。

[11] *N'i a celui n'ait son puioit. (Béroul, 1232)*

[12] *N'i a celui n'aie fait honte. (Renart, Ed. Roques, 1764)*

これも對象把握が一重なのである。現實の世界に於いては、甲の對象は乙の對象とある關係を結んで

ると同時に丙の對象とは別の關係を結んであるといふやうに、重層的な關係を持つてゐる。この重層的な關係を忠實に表現しようとするれば *Embrassez celui que vous aimez.* のやうに、言語表現の上でも對象の關係を重層的に表すことにならう。これを單層的に表せば文が不明確になる虞れがあるが、單純な思想を述べる場合は單層的な表現で事足りるのである。その際對象を〔10〕のやうに「不特定關係詞」で表はす時もあれば、〔11〕〔12〕のやうに「特定關係詞」で表はすこともある譯である。

次の三例は對象を明確に捉へられないか、或いははつきりと判つてゐても言ふのが面倒臭いか、或いははつきり言はなくても判ると思つてかして、抽象的に漠然と不特定關係で言ひ表はしたものである。

[13] *Donnez-moi de quoi écrire.*

[14] *Il a de quoi vivre.*

[15] *Merci, monsieur.--- Il n'y a pas de quoi.*

où といふ語も疑問副詞とか關係副詞とか、機能に従つてばばらに説明されてゐるが、これも場所を表現主體と不特定關係に於いて表はしたものに他ならない。

[16] *On est puni par où l'on a péché.*

この例文でも無理に先行詞省略と考へるべきでないことは前に述べた通りである。

que passe-partout の正體 最後に、先程から何度か觸れて來た *que* に就いて紙數の許す範囲内でもう少し論じたいと思ふ。他のロマンス語、例へばイタリア語の *che*、スペイン語の *que* でも事情は同様かも知れないが、フランス語を學ぶ者が驚くことは *que* の用法が實に多種多様なことである。名詞節を導く用法の他に、比較節・讓歩節・目的節・理由節・結果節等を導く用法や願望・例外を表はす用法等々があつて、一見あらゆる接續詞に代つて用ゐられるかの印象を與へる。つい *que* 自體にそのやうに澤山の意味があるかのやうな錯覺を起し勝ちで、實際に辭書や文法書の説明もさうなつてゐるが、*que* はこれまで述べて來たやうな「不特定關係詞」としての本質を少しも逸れてゐる譯ではなく、*que* 自體が理由だの目的だの時だの讓歩だの比較だの例外だの、殆んど無限に近い意味を持つてゐる譯ではない。さういふ意味を表はす表現形式は零記號になつてゐて、言はば言外の意味になつてゐるのである。主節と *que* に導かれた節との論理的關係から、聴き手・読み手は上のやうな様様の意味を察知するのである。二つの思想を並べて述べる場合に、大きく分けて所謂順接と逆接の二つがあるが、いずれか一方の思想を *que* によつて先驅的に實體化して概括的に述べてゐるに過ぎないのである。*que* の次に具體的に述べられる事柄は常に主語・動詞・補語を備へた言はば完全な節を成してゐるとは限らず、名詞等を單獨に提示したりすることもあれば、また認識にはあつても判りきつてゐるので表現の面では省略部分が多く、完全な節を成してゐないこともある。中にはそのやうにして省略することが一つの文型として定まつてしまつたものもある。

[17] *J'étais au bas de l'escalier que je l'entendais encore s'écrier et gémir.*

例文〔17〕は時間的に密接な關係にある二つの思想を並置してをり、*que* は後半の思想を抽象的に實體化して捉へた先驅的表現である。そこから兩者の同時性を我我は察知するのであつて、初めから *que* に *quand* の意味があるのではない。

[18] *Il travaillerait dix fois plus qu'il ne réussirait pas à l'examen.*

この文では論理的に互ひに矛盾する事柄を並べてゐる。それと條件法とから假定的讓歩の意味を我我は知るのである。

[19] Je ne vous demande qu'un peu de service.

例文〔19〕においても、今までと同じく que を境目に二つの思想が並置されてゐることに注意しなければならない。即ち一方の思想は Je ne vous demande pas beaucoup de service とか Je ne vous demande rien とか言ふ内容である。もう一方の思想は Je vous demande un peu de service である。例文〔19〕の前半が前者の思想に相當する。但し空想の要求である beaucoup de service や rien は省略されてゐる。また、後者の肯定の思想に影響されて ne のみの否定となつてゐる。que は後者の思想を概括的に把握した先驅的表現である。que 以下では je vous demande の部分は明白なので省略され、肝腎の現實的要求である un peu de service だけが表はされてゐる。文の前半に pas や point を用ゐて斷定的な否定形にすることは十七世紀に見られたことがあるが、意味の混亂を招く所爲か、廢れてしまつた。

[20] Jean est plus [aussi, moins] grand que Paul.

上の例文は前半で Jean の背丈についての思想を述べ、これと並置して Paul の背丈についての思想を述べて二人の背丈の優劣を論じてゐる。後者の思想を que が先驅的に概括して表現してゐる。que 以下では比較の対象だけを表はせば他は言はずもがななので省略してある。

[21] Jean est plus grand que vous ne le pensez.

文の前半は Jean の背丈についての思想を表はしたものであり、que 以下は聞き手の考へを述べてゐる。この文でも後半部分を que が概括して實體的に把握してゐることに變りはない。前半の肯定の思想に影響されて que 以下では ne のみの否定となつてゐる。比較級を伴つた前半部分を後半部分とが並置されることによつて表現主體が前半と後半を比較してゐることを我々は知るのである。

[22] Il ne se passe jamais une semaine qu'il ne nous écrive.

この文では思想が實想と空想と二重になつてゐる。實想は Il ne se passe jamais une semaine sans qu'il nous écrive であり、空想は Il se passe une semaine sans qu'il nous écrive である。〔22〕の前半部分はこの實想を表はしてゐる。但し sans qu'il nous écrive の部分は、文の後半で同一内容の思想が繰返されるので省略されてゐる。que は空想を先驅的に把握してゐる。但し、空想の前半は明白なので省略されてゐる。「音沙汰なし」といふ空想はあり得べからざることとして接續法で表はされ、「必ず手紙をよこす」といふ肯定の實想に影響されて ne のみの否定となつてゐる。

他の que の用法についても若干説明を加へよう。

[23] Que Dieu lui pardonne!

この文では願望そのものを表はす部分は零記號となつてゐて表現形式上には表はされてゐない。que は願望の対象を先驅的に捉へた表現である。que や接續法そのものに願望の意味がある譯ではない。

[24] C'est peu de chose qu'un homme.

C'est...que の所謂強調構文においては、que の次にいつでも主語動詞等を備へた節が來るとは限らない。〔24〕では表現対象たる一個の人間を先づ「特定關係詞」ce で捉へて、「とるに足らぬもの」との判断を下し、次に que が ce によつて捉へられた表現対象を一旦抽象的に捉へかへし、最後に表現対象そのものを提示してゐる。かうすると表現対象が聞き手に明瞭に示されるのである。

[25] O récompense après une pensée

Qu'un long regard sur le calme des dieux! (Paul VALÉRY, *Le Cimetière marin.*)

これは感歎文であり、〔24〕と同一構文の省略文である。これも判断の内容を先づ述べて次に判断の対象を抽象的に que によつて先驅的に捉へ、最後に何を対象としてゐるのかを明示するといふ表現の仕方をしてゐる。

[26] Qu est-ce que la littérature?

これは〔24〕と同一構文の疑問形である。疑問の対象を聴き手にもつと印象強く示さうとすれば、更に所謂強調構文 c'est …que を組込んで

[27] Qu'est-ce que c'est que la littérature?

となる譯である。

以上、所謂代名詞に就いての従來の考へ方を再検討し、本質論を踏へ乍ら、この品詞がフランス文の展開に於いて果す役割に就いて鄙見を述べさせていただいた。言語事實を機能主義的に解釋することが如何に間違つた方法であるかが判つていただければ幸ひである。讀者の忌憚なき御批判を期待し、拙論が一籌も二籌も輸する研究の出現を切望する次第である。

註

(1) チョムスキイは自分の立脚するカント的な認識論に制約されて、ポオル・ロワヤル文法が行つてゐる語の二分区分（主體的表現を擔ふ語と客體的表現を擔ふ語）が全く理解出來ず、その著作 *Cartesian Linguistics* に於いてトンチンカンな解釋をしてゐる。語や變化語尾がいつれの表現に屬するのか明かにすることが如何に重要であるかに就いては、三浦つとむ編『現代言語學批判』（勁草書房、1981年）所収の拙論「フランス語動詞時稱體系試論」「スペイン語の ser と estar」を参照されたい。

(2) 『翻譯の世界』1981年1月號所収の宮下眞二「英語は孤立語的膠着語的屈折語である」pp.16-22 参照。

(3) 時枝誠記『日本文法口語篇』岩波書店、1950年 p.77 ss. 参照。

(4) 表現主體と第一人稱代名詞の表はずもの、即ち表現主體を表現對象化したものとの區別と聯關を明かにすることが出來なければ言語のみならず表現全般の謎を解決することなど覺束ないことを知るべきである。詳しくは三浦つとむ著『日本語はどういう言語か』講談社學術文庫 p.126 ss.

(5) 表現主體は現實的には聞き手の眼前にゐながら觀念的には表現對象と時空間的に様様な立場に立ち得る。このことを理解出來ないと佐久間鼎の唱へる「繩張り説」が正しいもののやうに思はれて來るのである。

(6) 例文〔1〕〔5〕〔6〕のカルヴァンからの引用は読み易さを考へて筆者が勝手に綴字及び句讀點を現代語風に改めたことをここにお断りして置く。